

## オバマ大統領のカイロ演説は「新しい始まり」となるか

2009年6月4日は記憶されるべき日になるでしょうか。この日、オバマ大統領は、カイロ大学の講堂に集まった聴衆（イスラム教徒が大多数と思われる）に対して、アメリカとイスラム世界との間に「新しい始まり(a new beginning)」をもたらそうと呼びかけました。

私は、この演説は、オバマ氏が大統領に就任してから行った演説のなかで最も重要なものではないかと思ったので、ワシントン・ポストから全文(細かい字でA4判8.5ページ)を取り出して読み、約55分に及んだ演説をニューヨーク・タイムズが配信したビデオで聴きました。また、この演説に関して、ワシントン・ポストとニューヨーク・タイムズが掲載した論説を読みました。日本の新聞もこの演説の要旨を掲載しましたが、関係する記事はこの演説の重要性をとくに強調したものにはなっていないかと思っています。

アメリカの大統領には、演説の草稿を書くことを専門にしている人たち(speech writers)が付いているのですが、この人たちは、アメリカ国内のイスラム教徒の団体から意見を求めるなど、今回の演説の草稿を書くにあたって入念な準備をしたそうです。オバマ氏は、そうしてできた草稿に自ら手を入れるのに長い時間をかけたと言われています。こういうことをするのは、世界中でアメリカの大統領だけではないでしょうか。また、オバマ氏はとくにそういうことに熱心な人だと思います。オバマ氏以

前の大統領で、よく準備された演説をしたのはジョン・ケネディでした。

オバマ氏のカイロ演説は下記のような特徴を持っています。

(1) 言葉遣いに細かい配慮が見られたこと。①「テロリスト」の代わりに、「暴力的極端主義者(violent extremist)」が用いられました。これは、ブッシュ政権下では、イスラム教徒とテロリストが同一視されるような時期があったことを考慮に入れて、オバマ氏はブッシュ政権との違いをはっきりさせたかったのでしょう。②祖国を意味する homeland という言葉がしばしば使われました。これは、パレスティナとイスラエルの双方に対して使われています。③イスラム教国という言い方は使われず、一貫して「イスラム教徒が多数を占める国(Muslim-majority country)」が使われました。これは、どの国にも少数派が存在することに配慮したものと思われ、実際に、レバノンのマロン派キリスト教徒、エジプトのコプト教徒に関する言及がありました。④ナチス・ドイツによるユダヤ人のホロコーストに言及したとき、国名として第三帝国(The Third Reich)が用いられました。これは、オバマ氏がエジプトの次に訪問するドイツに対する配慮だったのでしょうか。

(2) コーラン(英語の Koran の発音はコーランに近い)に関する言及が多く、引用が重要な場面でなされたこと。演説が始まって直ぐ、コーランの「神を意識して、常

に真実を話しなさい (Be conscious of God and speak always the truth.)」が引用され、オバマ氏は、自分ではできる限りそうするよう努力すると述べました。演説は、イスラム教のコーラン、ユダヤ教のタルムード、キリスト教のバイブルからの引用で終わりました。これまで、アメリカの大統領の演説には、バイブル、とくに旧約聖書からの引用が多かったことはよく知られていますが、今回の演説はその伝統を他の2つの宗教にまで拡大したものになっています。

(3) アフガニスタン進攻とイラク戦争の性格を区別したこと。アフガニスタンへの進攻は、9・11で現実のものとなった安全への脅威に対処するために選択の余地なく行ったものだったが、イラク戦争はブッシュ政権によって選択されたものだったと述べました。オバマ氏としては、これによって自分とブッシュ政権との違いを明確にしておきたかったのでしょうか。しかし、オバマ氏は、アフガニスタンとイラクに対するアメリカの今後の責任を明らかにしました。

(4) アメリカがイスラエルとパレスティナを含むアラブ社会の双方に深い関係を持っていることを強調し、双方に理解を示したこと。同時に、両者に対して厳しい注文を付けており、発言のバランスを取ることに気を配ったこと。オバマ氏は、アメリカがイスラエルと強い絆で結ばれていることはよく知られているとおりで、それは切ることのできないものと言いました。

(This bond is unbreakable)。また、ナチス・ドイツによるユダヤ人のホロコーストはなかったと言う人たちがいることに強く反発しました。オバマ氏は翌6月5日にドイツに行き、ワイマールの近くのブーヘンワルト (Buchenwald) にあったユダヤ人強制収容所を訪問し、ホロコースト犠牲者追悼碑に白いバラを捧げて、カイロでの発言を裏付けました。しかし、イスラエルが、本来の領土ではないヨルダン川西岸地区で入植地 (settlements) を着々と増やしてきたことには正当性 (legitimacy) がなく、アメリカは受け入れることはできないと明

言しました。パレスティナについては、人々が置かれている劣悪な状況は許せない (intolerable) ものだとして、アメリカはパレスティナの人々の正当な要求に背を向けることはないと言いました。その反面、イスラエル市民に対する暴力の行使を止めるよう要求しました。そのうえで、イスラエルとパレスティナ双方の人々に、オスロ合意に基づくロードマップの下での義務を守るよう呼びかけました。

(5) イランが目指している核兵器の開発に関して、イラン政府と前向きな話し合いをする用意があると述べたこと。オバマ氏は、これまでにアメリカとイランの間にあったいろいろな経緯に触れ、過去にいつまでのこだわらずに (Rather than remain trapped in the past)、双方の不信を乗り越えて、勇気と公正さと決意をもって新しい関係を築こうと呼びかけました。また、核不拡散条約の加盟国になれば、イランが必要とする原子力の平和利用は可能になることを指摘し、これについては全ての国々が同じ条件下にあると述べました。この発言は、核不拡散条約に加盟していないイスラエルにも向けられているものと考えられます。

以上に述べたこと以外に、民主主義、女性の権利、経済発展、教育・科学・技術などについても発言がありましたが、差し迫った重要問題は、イラクとアフガニスタンにおける不安定な状態、パレスティナ問題、イランの核開発への対処であることは疑いなくところです。オバマ氏自身が述べているように、これらの問題は簡単に解決するようなものではありませんが、世界の平和は、アメリカとイスラム世界との関係に大きく依存しているという現実があります。オバマ政権が何らかの突破口を見つけることができるかどうかは、世界の将来を左右することになるでしょう。今週から、オバマ政権の特使がこの地域で活動を開始することになっているそうですが、その成果が注目されます。(おわり)